

祖父と私

安藤 優美

チヨキ、チヨキとハサミの音が響く、私は祖父の髪を切る。

祖父は八十五歳を過ぎ、祖母と二人暮らし。今年の冬に大病を患い、やっとのことで退院したばかりだ。今は自宅と病院を行き来する生活。今日は祖母が不在のため、祖父と私で留守番だ。

チヨキ、チヨキ、二人だけの部屋に響き渡るハサミの音。床屋に行けるほどの体力はなくなってしまったから、最近では私が祖父の髪を切る。

ちいさくなつた祖父の背中、祖父にお世話されていた私が、いつからか祖父のお世話をしていること。時の流れはあまりにも無常で、現実を手に行っている恐れを抱かせるけれど、なぜか温かくて、かなしい。

チヨキ、チヨキ、思いはめぐる。小さい頃祖父が私の手を引いて、アイスクリームを食べに行ったこと。写真に凝っていた祖父の被写体は、いつも私。家に遊びにいけば満面の笑み。

チヨキ、チヨキ、祖父の昔話。祖父は青年期、呉服店を営む実家へ、列車で仕入れの仕事をしていたという。その後、国鉄で新幹線の運転士となる。そのためか今でも時間には秒単位で厳しい。

チヨキ、チヨキ、しっかり者の祖父が、知人の名前を忘れた時にうまれた疑心。自信をなくしてゆく細い声。入院。食事が口から食べられなくなる。

「ごはんの味は忘れても、優美ちゃんのこととは忘れないよ」
なんて聞いた日の夜は、眠れなかったこと。

チヨキ、チヨキ、退院。医者も驚くほどの回復だった。歩くスピードはゆっくりだけれど、今は少しずつ、少しずつ前に進んでいる。

チヨキ、チヨキ。よし、出来たよ。

手鏡をのぞき込みながら、切りたての白い髪をなでる祖父は、満足げに笑う。帰宅した祖母にも、得意げな様子で見せる。

こうしていつまでも何回も髪を切り続けたいと願う私の思いは、届いているのかな。

もし届かなくともいい、祖父は生きようとしていて、命に応えようとしている。伝わる、芯を感じる。だから私も寄り添いたくなる。

また来るね、の一言に、感謝と願いと希望を込めて。